

可觀小説卷卅九

一、初冬朔

朝霜は昨日の秋もおきてけりあはれ冬野の氣色なるかな
いひしらす染し草木も白妙の霜にをさまる武藏野のはら

一、延隆の許へ

去頃延隆の許へ、政右の事とぶらひ申遣ける返し、なき名
忍ぶたもとの露おほしやらるゝ御歌の返し。

おほ方の露けき空とながめこし秋はいかなる夕なりけん
折から雁の鳴けるに、はかなさを告こす玉章に、なみだも
かけてきぬらんとの御歌に。

白露も天つ空飛ぶかりがねも物思ふ袖のなみだとぞなる
さりし人のとし頃和歌の詞に心をそめ、其名ありし事をお
ぼしける御歌に。

一、室直清秋懷之詩

六日、昨夜丹直清訪余病中。携示皆所詠秋懷之詩十首。余
沈吟之餘頗發感興。病未全快。殆倦筆視。故寫殊所險賞。

一、白鷗軒へ返ごと

昌興丈士こゝちつねならず、宮づかへにさへ懈り給ひし事
を聞より、いぶかしけれどたづね行べき方にしあらざりけ
れば、かくいひておくり侍るならし。 白鷗軒

せめてさは心ばかりは通ひ見む君がみもとにかゝれ浮橋
使をとめて返ごと

白鷗軒の御許より、やつがれがいたつかはしきころの程、
いぶかしく思ひ給ふけれど、まうで給ふべきは世の障あれ
ば、心ばかりはかよひみなど、三十もしあまりの御すさ
びに、よせ給ふなる浮はしを、かけまくもかたじけなさ、
御返ごと申す。

一、葛巻克明へ

よしやさはわたらずとても忘れめや心かよへる中の浮橋
十七日。今夜寛信、種信等訪尋、閑談及深更、克明兄より庭
前の菊花に茶取添て、座中へたうべけるまゝ、短冊に書て
まわらせける。

深き夜の月のひかりのあはれさも折つる袖にしら菊の花
御返し

數首云。

秋後日多雨。離居偏寂寥。庭荒過客少。酒熟故人招。露重荷
全破。風寒林半凋。家卿歸未得。尙覺月程遙。

時行荆棘裏。昔日入名園。雲接深川里。野連淺草原。荒烟板
屋曉。古木傘亭存。偏覺客愁減。歸來後掩門。傘亭所石爲獨柱。林
間亭然。是
先君時物。

幽林連屋後。細路引橋邊。木落人家出。雨晴砧杵懸。都城還
隔俗。溪谷可棲仙。更喜露微祿。囊中足酒錢。

夕陽江上寺。縹渺隔雲烟。孤塔九層出。長林一帶連。難從玄
豹隱。只對白鷗眠。風土美如此。淹留可閱年。

一、初冬書懷

人間憂樂自相生。閑坐感時心更清。簾外孤松霜後色。窓前落
木雨中聲。

心あれや常磐の松も紅葉ばもおなじ夕の木がらしのかぜ

一、時雨を聞きて

十一日。此あかつきがた寝覺て侍りけるに、時雨の音のさて
もと思ふばかりに聞え侍りけるまゝ、思ひつゞけ侍りける。

思へどもおなじ軒端に降雨のいかに時雨は音かはるらん

深き夜の月の光のあはれをもいひこす人の言の葉にしる

一、自警の情を

此頃自警の情を思ひてよみ侍る。

月花は我こそしたへしたはまし只世の中の色ぞくやしき
忘るなよ忘れざりせばさてもあらん花も紅葉も風吹世を

又病暇のつれづれさ、草木の名十二をこめて。

柴 柿 菊 肉 杞 米 藎 白 芥 子 柚 蔞 椒
なにかきくころにこめはあしからじつゆもみだるゝを
ぎのした風

時のまもはや此空にすむ月の光わすれてぬる夜半ぞなき

一、山本基庸書道傳受の事

廿日。山本孫八郎基庸推明京都より下着、是は入木道練習の
事に付上京被仰付候處、持明院殿基時傳受相濟罷歸候。御
證文等入御覽候。基庸此度以御意稽古、其上道之熱心深且
又墨跡其器量有之候に付、殊に深秘七條の内、額并武家御
旗等の秘旨、被經叡聞御相傳、其餘悉傳受之旨。名乗被改
基庸。

一、後藤演乗が宅地池水の繪
後藤演乗宅地池水等の繪落手。短冊遣之。